小野のわかれ

山内薫 著

東京 中庸堂書店

小野のわかれ

小山内薫

小野のわかれ

目次

〔一のまき〕
虹
朝雲
君が憂
蚯蚓の歌
春宵
晩鐘
古城
小野のわかれ

狂人の歌へる秋の歌
弱き人
舟の歌
人形
鳥籠
月見草
〔二のまき〕
よばへごも
落葉歌
水葬
亡弟

〔三のまき〕
うらみ顔
小鳥
悲しき朝
まよひ
川やなぎ
黒き影
いたくなせめそ
〔四のまき〕
なげき
朽木

周行
さめがたき夢
おもかげ
繪すがた
一、戀の泉
二、鳥にしあらば
三、車のひぐき
〔五のまき〕
月下白屋

一のまき

虹

あふげ青葉ぞたゝる岡を
古會堂の屋根のいたゞき
十字なす黄金の光
そこよりぞ虹の梯
大空に色彩なして
麓なる小村にいたる
あゝ神に至らむ路か

O God, thou art my God.

——— David.

紫に紅に萠葱に
美しき「愛」の色彩
君、米の黒きを泣くな
君、衣の襤褸を泣くな
見よ君が茅葺屋根に
うるはしの橋は通へり

朝雲

あゝ彼處昨夜燒けし村
かの空の今朝は曇りて
燒け殘る甍のうしろ
恐ろしき雲のいきほひ
窓の吐く烟の如く
白く飛び黒く翔りて
中空に舞ひつ狂ひつ

折からの朝焼紅く
燃ゐあがる雲に映ろひ
碾きつまた碾きつ
戸に迫る炎の舌の
光さへ今見るがごと

あゝ空よ君あはれむや
一夜經て屋根なき子らを
傷ましき昨夜のけしき
大なる胸に畫きて
むら雨も注がむばかり

今もなほ悲しき色に
閉ざくれぬ君が顔容

君が憂

君が憂は深からむ
森を林を草村を
くぐりて至る奥山の
暗き淵よりかすかにも
悲しき鳥の音はすれど
闇の谷底ほのかにも
うれひの花の色見ねず

君が憂は高からむ
風をみ空を白雲を
うち越にあがる天の原
思ひわづらふ明星の
寂しき光眼に入れど
はるかなる夜の星座より
悲嘆の聲は聽きがたし

心浮べるわれなれば
深き憂は知りがたし
想地を這ふわれなれば

高き憂は知りがたし
たゞ憂ある君知りて
あはれに堪へぬわれが手に
あぐるを許せ髪のほつれを

蚯蚓の歌

花あこがるゝ詈りて
酒飲みあへぐ嘲りて
戀はみながら汚れつゝ
もの知るがごゝ眠れる夜
蚯蚓は只ある歌をうたへる
近寄れば花うるはしう
飲みさせば酒あまくして

戀もきよしとおぼゐては
解したるがごと眠れる夜
蚯蚓は同じ歌をうたへる

花くちづけて蕋にがく
酒瓶のそこ滓を見て
人こそけがせ世の戀と
悟れるがごと眠れる夜
蚯蚓は同じ歌をうたへる

あだには觸れじ今は花

あだには飲まじ今は酒
戀聖かれと祈禱して
神知るがごと眠れる夜
蚯蚓は同じ歌をうたへる

春宵

（一）

初花咲くと見し宵の
その宵よりや初蛙
鳴くは小花の嬉しきか
咲くは小歌の嬉しきか

（二）

咲きて二日と見し宵の
その宵風の吹き出でゝ
鳴けども鳴けども花は散り
散れども散れども蛙鳴く

晩鐘

君や歩をはこぶごき
連翹すみれ黄に紫に
君や黒髪さやぐごき
挿頭ゆかしき青朽葉
落つる日三たび轉けば
あかね山吹胸に散り
東に淡き夕月は

君がそびらを薄みどり
色を見よこの君ならば
心うれしきこの夕
みたまの律呂聞ねば
胸は憂に堪へがたし
光を空に浴みして
杉の木立はあきらかに
塒に歸る山鳩も
直路あらはに急ぎ行く

遠山ざくら遠ければ
色も姿もかひぞなき
君が心と夕雲雀
おち行く宿をいづれども

ひとしき道は歩めども
われ晩鐘を慕ふ時
君が心は川添ひの
柳にそひて行方知らずも

古城

霜枯の芝のこがねを
踏みしめて一人歩めば
往古を歌ふがごとき
聲はなに栗葉の古城

とう〳〵と胸に響くを
松風の音と聞きつゝ
松かげの岡にのぞめば

柞川ながれ流るゝ

往古を慕ふと見しは
新しき淵瀬なりけり
既往に歸ること見しは
進みゆく調なりけり

過ぎし日を痛み煩ひ
去にし夜を嘆き苦む
痴愚を笑みつ嗤ひつ
はゝそ川照る日に流る

小野のわかれ

おほろにゆらぐすゝきの穂を
ふたりして見したゞそれのみ
いづこより來て逢ふや狹霧
見る〳〵別るゝその嘆きよ

ゆふべの霧に君の姿
ゆふべの霧に君のこゝろ
神のつゝむにまかせおきて

おぼろにおぼろに見失ひぬ

ところ名知らぬうらみあるも
水よき川は忘れがたし
さりや夕のさ霧こめて
悲しやながれの行くへ知らず

あゝこのわかれ永世なりや
すがらむ袖の糸も消にて
目白の森に鳥啼けど
風寐るやどりを告ぐるならず

なぐさめありや地をのぞめ
ならひてみのる黄金の穂も
來む年逢はむすべをなみに
きらめく利鎌を泣きて待つよ

なぐさめありや天をあふげ
運命の風の吹くがまゝに
飛びわかれ行く雲のあゆみ
むらさめ含みてたどりたどり

あゝこゝに逢ひこゝに別れ

またこゝに來て君を見ずば
其日のこゝろ今日のこゝろ
胸なるいたみはおのれひとり

君肌寒を知れるならば
身にひきしめて今日忘るな
すゝきがうれのひと雫に
胸なるわたつみわれ亂れむ

あゝ君去りて天つ風の
人を隔つる幕ひけば

のこるはひとりわれとすゝき
嘆くにかひある友もなしや

すゝきもわれに同じこゝろ
われも薄に同じおもひ
あゝ草と人ならびつゝも
あゝ草も人も共にさびし

あゝ君去りて天つ風の
あふ瀬のなごり地を吹きて
この日の思消さむめぐみ

それさへ甲斐なや胸の谷間

おもひは果てしすゝき原の
うれよりうれと君の行くへ
まなこにたごる路のはては
血しほぞ燃ゆらむ西のみそら

雲行き迷ふ西の空よ
夕日は人に來る朝の
花やかなるを豫て言へど
あくその明日のありやなしや

狂人の歌（る秋の歌

朝の蟋蟀歌優しやと
耳を地にして平まれば
霜は冷たく頬を刺す
あははははあはは
をかしの秋や

松の樹の根の茸可愛やと
松の葉あつく着せにしを

茸は腐りし葉のこかげ
　あははあはは
　をかしの秋や

薄招くごひたすら思ひ
走りて寄りて縋りしに
薄、抱かで手を切りぬ
　あははあはは
　をかしの秋や

芋の葉すべる白露吸へば

にがや泥ある舌觸り
風に向ひて唾を吐く
　あははあはは
　をかしの秋や

柿の甘きに小石を投げて
食ふにはあらず地に落とし
柿の滅亡に手をたくく
　あははあはは
　をかしの秋や

伯勞の言葉のなぞ解し難き
木の葉をふる、ふわが聲に
鳥は東に逃げ去りぬ
あははあははは
をかしの秋や秋や

小指嚙み切り小指をふれば
血汐まじらふ秋の水
刀に似たり秋の水
あははあははは
をかしの秋や秋や

虫のもろ聲樂しや月夜
石を枕に一夜寢し
あかつき胸の骨高し
あははあははは
をかしの秋や秋や

花野迷ふは花野のあるじ——
狂ひ誇れる手をこりて
隣家の妻よ何を泣く
あははあははは
をかしの秋や

弱き人

照り初めぬ宵の明星――
彼はまた涙にくれて
家を出で夕さまよふ

見出でたり宵の明星――
いま彼のうるめる眼にも
よろこびの光はやどる

さびしくも彼は笑ふよ
くらやみに人を得たりし
園の夜の白梅のごと

うち仰ぎまたうち仰ぎ
手をさゝげ胸をさゝげて
見よ彼は星をよろこぶ――

天がける雲のちぎれは
風に乘り輕く來りて
あはれいま星を隱しぬ――

たちまちに星は隱れぬ——
たちまちに彼は嘆きぬ
白梅の友いま何處

ひたすらに顏を蓋ひて
ひたすらに涙に暮れて
神の手も今はよしなや——

早く疾き雲のあゆみよ
かれ顏を蓋へるひまに
行き過ぎぬ星の御座を——

（わかものよ さはれ仰げや
また星は雲をのがれて
うれしみの光を放つ）

あくされど細き灯は
そよ風に早くも消ぬ
彼はなほ顏を掩へり

（若者よ さはれ仰げや
星はいま君の涙に
おのれまた悲しく光る）

あくされご傷める葦は
そよ風に早くも折れぬ
彼はなほ涙に暮れつ

（わかものよさはれ仰げや
かの星は雲をのがれて
そを君に傳へがたきぞ）

あくされど羽なき鳥は
たゞ銃のひゞきに倒る
彼はなほ嘆き崩れぬ

（若者よ、さはれ若もの
たゞ空をみ空を仰げ
悲しみの去げき星瞬）

あくされご「弱き國」には
鷄も涙にくれて
悲しみの夜は明けがたし

（わかものよさらば若者
言葉なき天なる星の
悲しみは君こいづれぞ）

闇の夜の梅は悲しや
そよ風のそよともなきに
おのづからあく散りかくる

かなしみの背を覆ふ
大空になほ響く聲
(悲しみは君といづれぞ)

舟の歌

乘る人もなき舟ふたつ
黑き鎖につながれて
霞に雨に露霜に
いくとせ岸に漂へる

月夜は風をたよりつゝ
波の光もはぢらふや
ふたつ密に寄り添ひて

ものひた〳〵と語りあふ
暗夜は更にしめやかに
夢におごろく葦蘆の
いと微なるそよぎにも
かくれて低き密語
やがて海荒れ波怒り
嫉妬の炎青々と
縁の綱手仇にして
よするや潮沖つ潮

からき潮につらき世に
むせぶよ小舟捨小舟
あはれ一夜は一夜より
鎖の錆のますばかり
思を寄せて共に泣く
松のさゞんざ聲も枯れ
舟をめぐりて慰むる
魚の涙も盡き果てむ
世に捨てられて隱るれば

二人住むとて責めらるゝ
舟のちぎりを疑へば
天に聲ありほがらかに

（さもあれ錆のうもるほど
鏈環鏈環は固くして
今は津浪の襲ふとも
二つの舟は永久に離れじ）

人形

椰子の樹の木蔭をたゞり
稚兒載せて釣に伴する
なつかしの象の牙より
彫まれしこれや人形
大いさは指にみたねど
僞りの血ぞほ通はず
世に清き工匠のこゝろ

ちひさなる軀を流る
艶なるは姫に添はねど
偽りの衣はまことはず
まはだかの清き姿に
神の風さながら迫る

すゞしろの色の黒きは
親を知る烏のつばさ
唇の色の紅きは
神を知る鳩のくちばし

手をとれば手は従ふよ
かたしろの心や柔和
膝折れば膝は折るくよ
「君子は響のごとし」

冷しと俄に云ふな
掌にのせても見よや
やがてわが焔通ひて
かすかにも背のぬくみ

白熊のあなうら凍る
雪か否氷か非ず
まこと世に人の心の
冷きにたぐふものなし

親友と云ふもあばしよ——
ひと夜經て門の扉の
明けぬれば闇を忘れて
わかるゝや右に左に
朝風の冷きをよそに

わが園を離れぬ花よ
わかるゝに力なきこそ
かたしろの足たふとけれ

もの云はぬ憾な云ひそ
たゞ暫しかたしろ抱け
わが胸のごよみ通ふぞ
僞りの答にまさる

魚をとる獺か否
鷄奪ふ狐か非ず

まこと世に人の心の
偽に類ふものなし

親友の胸の空にも
夕立の魔は翔け來り
われ雲のかげに隱れて
濡衣を人に着するよ

山梔は云はず語らず
花白う闇に散るなり
偽るに言葉なきこそ

かたしろの口たふごけれ

もの聞かで永久にあれかし
汝が耳のほとりに魔あり
入り來る至誠の聲の
音をかへて胸に響かす

もの云はでとはにあれかし
唇のほとりに魔あり
出で來る至誠の歌の
節變へて世に響かすよ

偽りの衣はよしや
この清き清きかたしろ
かくも身に渦巻き來る
世の塵にあてむは酷し

苔纏ふ巖を見ては
この清きかたしろ被む
衣もまた神わざならし
衣一重着せてやりたや

さて文は――なきこそよけれ
啼かぬ鳥匂はぬ花の
染模様如何にかすべき
たゞほしやふさはしの色

紅は花のうつろひ
こ緑は柳の落葉
ここしへの空の青こそ
いましの衣に縫はまほしけれ

鳥籠

『大空の鳥と生れて
籠ひとつ守る苦しさ

『花は待つ友ごち歌ふ
いかでわれ牢獄逃れむ』

（翼ある鳥は逃れて
翼なき籠は殘りぬ）

『君去りて何の清水
君去りて何の摺餌ぞ

『君なくてわれ生命なし
君なくてわれ塵あくた』

（翼なき小籠は椽に
舞ひ戻る鳥を待つなり）

『苦しとて歌もうたへり

狹しとて舞もまうたり

『雨知らぬ誰が情ぞ
飢知らぬ誰がめぐみぞ』

（翼ある小鳥は空に
美し籠いつか見出でむ）

月見草

北上川の川上の
川中島の月見ぐさ

うすき黃金の花ひらを
見る人もなし岸遠み

雨降り來れば降るまゝに
しとゞに濡れて濡れて

水嵩の増せば増すまゝに
身を泥うみに沈めつゝ
泥水逝けば逝くまゝに
再びめぐり逅ふや日光に

二のまき

よばへごも

ゆうべのそらをてりませし
つきのかぶやきいまいづこ
ゆうべのそらをちりばめし
ほしのきらめきいまいづこ
たゞはかなしや戸によする
あさひにゆめのやぶれては
あゝよばへごもよばへごも
あゝよばへごもよばへごも

My favourite thought recognizes Death as the kind nurse who says, 'Now then, children, you must go to bed and wake up in the morning.'

——— G. F. Watts.

はまのいさごにたはぶれし
わらひのいろよいまいづこ
おきのいはほこたくかひし
いかりのいろよいまいづこ
たゞはかなしやうちよする
なみもひとたびかへりては
あくよばへごもよばへごも
あくよばへごもよばへごも
まつにゐづくのさはなるを

なきたまひけるこゐいづこ
あしのかたらひみつなるを
ゐみたまひけるこゐいづこ
たゞはかなしやあめよぎる
かぜもひとたびさかりては
あくよばへごもよばへごも
あくよばへごもよばへごも

落葉歌

父と兄と姉とを相次いで
うしなへる少女にあたふ

父の葉のをとこひ散りて
下葉なるわかきはらから
ことごとに露にぬれしが
ゆうべまた兄の葉散りて
けさはまた姉の葉散りぬ
秋風のまたくくひまに

はらりはらりはらりとばかり
君覆ふ葉かずは散りて
うらみごり霜にむせぶか
ことわりや妹のなみだ

いもうとよさしも嘆くな
うつむかでみ空を仰げ
君が上はづかに殘る
母の葉の片袖がくれ
大空や今ははろばろ

あゝ彼處かしこへ君の
姉や兄や父なる落葉
大神のめぐみの風の
亂るゝやたてがみ長き
白駒に乘りて隔りし

いもうとよさしも嘆くな
いま晝は日ぞ暖かき
いもうとよさしも嘆くな
いま夜は星ぞ親しき
よるひるの愛やめぐみや

聲なくておづに落ち來る
その光線葉の面に受けて
はらからの神に仕ふる
「天國」のたよりと知らば
あゝ妹よ徒におをれな

水葬

鬼薊、柊、繁る
地の上に戰ひ敗けて
水の上に君は幾とせ
釣床の夢も靜かに。
されど魔は水底づたひ
ひとすぢの帆綱の望
それをさへ斧の一ふり
水暗き安南の波路。

さはれ君地に呪はれて
さはれ君天のいとし子
水烟はかなく消ゑて
大空に殘る月影
あゝ君は波に碎けて
あゝ君はみ空にまどか。

亡弟

はらからと人間はゞ
おくつきと答ふべし

はらからの石なれば
わが胸も冷にわたる

三のまき

うらみ顔

麥の穗なみのよりくに
忘れし人を思ひ出づれば
あぜに散りたる菜の花は
見る世過ぎぬと恨み顔

The wisdom of life is always deeper and wider than the wisdom of men.

——— Maxim Gorky.

小鳥

櫻の蕾くろきゆふべ
小鳥一羽ねやに迷ふ
あか星そらに君を呼べど
涙に曇れる眼には入らず

悲しき朝

ねむれば嬉し夢園の
われに寄り添ふ幻影ありて
あくまぼろしこまぼろしと
開かず散らぬ花のかげ
合はず離れぬ手をとりて
ここしへ青き蔭行けば
燃ゆず冷ゆざる日の光
ふたりの袖をみたすなり

たゞ悲しきは世の月日
暮れては明くる鷄の聲
結びて消ゆる夢の泡
あくまぼろしと別れつゝ
さむればつらきうつし身の
身に添ふものは悲嘆のみ

まよひ

光は暗と手をわかち
み空も水とくちづけの
ここへ甘き夢さめて
さめて見知らぬ鳥けもの
「野に綠ます雨いかに
山白うする雪いかに
霰に山羊を襲はむか

さ霧に人をつくまむか

「或は風を吹き下ろし
孔雀の羽を奪はむか
いな七色の光ある
虹のかけはし渡さまし」

天地成りてけふ八日
若きみ空のかくや迷ひし

川やなぎ

てり日でり續ける十日
川やなぎ川に云へらく
「雨降らぬ空ゆゑなれど
わが枝もわが緑葉も
塵に染み土に染まりて
むさくろき幹や梢や
かくる身を君に映して
わがこくろ心苦しき」

夕立の來れる夕
川やなぎ川に云へらく
「すは今ぞ身もすがくし
うつさなむ清き姿を」
よろこびて頸をのせば
いま川は濁りて流る

黑き影

ちりひぢを戀ふるが如く
日の前にうつむきつくも
青空を胸に抱きて
日の光なつかしむなり
白百合の花の幾ふさ
音もなく外の面へ
夜に朝にうち開きては
日を慕ふ心のねがひ

その莖の雄々しき綠
その蕊の黃金のかをり
その花の清き姿も
たふとしや照る日の光
日の前に跪きては
地に落つる黑き影のみ

いたくふせめろ

綠葉に入らむとしては
「戀しや」とわれに一聲
綠葉をくぐり出でくは
「戀しや」とかれに一聲

綠葉は鳥のおくつき
みごり葉は鳥の子の宮
われめでし鳥は逝れて

かれめづる鳥は生れぬ
月姫のみことのまくに
そこに死にそこに生れて
新しき身にしあなれば
新しき聲も聞きなむ

ほとゝぎす汝を恨まば
月姫の光も絶にむ

四の巻

なげき

わが胸は鏡なす水
岸の上に君は燃ゆる火
そのまゝの火影やごとして
われはたゞ煌々に躍る

われのみか光るいろくづ
身を寄せて君をし慕ひ
見よかなた闇行く船も

SPIRIT.

Which do you imagine to be the more sweet, the sight of your beloved, or the thought of her?

TASSO.

I am not sure. This much, however, I will say: when Leonora was present to me she appeared but a woman; now that she is absent she looms as a goddess.

——— Giacomo Leopardi.

岸の上の君をよろこぶ

よろこばし夜毎に逢ひて
うるはしの波の夢路や
はるけくも永世にのびて
花と咲き蝶と躍りぬ

あくされど一夜のあらし
あくされど一夜のはやて
まがつみは闇の國より
手をのべて君を奪ひぬ

あく今は鏡なす水
大空の闇をうつして
あく遂に光るすべなし
あく遂に燃ゆるよしなし

朽木

もごよりこの世を海と知らで
軀を投げてし罪はわれに
小さき焚木に似たるわが身
音して消えけり水の面
ふたゝび燃えなむすべもあらじ
しづかに昔の夢に入らむ

ふたゝび燃えなむすべはなきも
炎焔のむかしを樂まむよ
ふたゝび燃えなむすべはなきに
(君はよ泰かれ夫を愛でゝ)
波路にたゞよふ朽木ひとつ
泊つるはいづこのあまが浦か
燃ゆるにすべなき朽木ごもる

思はいづこの浦に入るも
燃ゆるにすべなき身にしあれば
（君はよ康かれ夫を愛でゝ）

周行

（一）

麥のふた葉は匂やかに
むかしの夢をふきかへし
君に別れてさすらひし
みたまの傷をひきつゝむ
大根の花は淡白う

むかしの人をよびかへし
君に別れてさまよひし
まなこの曇おし拭ふ

おぼろに遠くかすかにも
消息たゑせぬ嬉しさに
世に忘るべき戀なれど
忘れかねたる君なれや

忘れかねたる君なれば
戀にはあらね路のべの

花のうなじを抱きつゝ
しばしはそゝげ熱き徐觸

（二）

いま愛しむこの花の
色か小島の夕日影
香か潮のむらしぐれ
ふるさと遠く嫁ける君
別れてわれは浮草の

長き月日の果はまた
今ぞ人なきいにしへの
岸にすがりて休らふと

この日この身を仄にも
思ひ出たまふ愛あらば
むかしの戀の影をだに
思ひ出たまふことなかれ

離別を天に怨まざる
この徐觸のむくいには

君よ夫を抱きつく
捧げよいとど燃ゆる徐觸

さめがたき夢

妹がかなづるたそがれの
琴のしらべにゆくりなく
友に送りし一もとの
櫻戀しくなりにける

さてしも後は梅を得て
にほひをひとり醉ひにしが
開くも散るもかぐはしき

花くちづけもあくまばし
七年春をいたはりし
愛は昔にひるがへる
櫻の花のひら〳〵と
胸もにほひをかぐばかり

はやこしかたの花園に
歸らむとにはあらねども
そびらにしたる梅が香の
いかで心をさそひ得む

おくりし花をわが庭に
かへさむとにはあらねども
まひるも夜も夢に咲き
夢にかつ散るものおもひ

あづ心なきこしかたの
春の白波うち寄する
夢の汀に生ひたちて
櫻も今はあふぐほど

耳をあぐればほろ〳〵と
花散る音も聞こゆなり
ひとみを見よやあざやかに
うす紅もやどるらむ

涙にくるゝ二夜三夜
妹もなぐさの口寄せて
さゝやぐ聞けば新しき
梅のにほひは高しとや

まこと幻を喚びさます
梅のにほひのまごころは
ひそかに胸にやみつくも
われはここしへさめがたき夢

おもかげ

ありあけの消ゆたるふしぎ
まよなかの夢はやぶれぬ
破れたる夢はこしかた
こしかたの君がおもかげ

うばたまのあやめなければ
めざめても君がおもかげ
眼の前を立ちも離れで

胸せまる涙こぼるる

あゝ見じとまなこ閉づれど
こづれども眼の中の
あら悲し同じ闇路に
去りあへぬ君がおもかげ

さぐり手に雨戸おしあけ
家の外にまろび出づれば
あめつちの闇夜をしめて
なほせまる君がおもかげ

くら闇はわが死の神か
おもかげはわが棺衣か
死の神はかけむく擴げ
命あるわれを包むか

はやきたれ朝の光よ
あさぎ空こ青海原
田よ畠よ山よ林よ
いそぎ來て天地しめよ

ほがらかにはや夜もあけよ
いさゝ川いざや流れよ
小牧原いざひろめきて
おもかげの居ごころ奪へ
七色よわが眼を領めて
おもかげの潜まば追へよ
光來てわが胸みたし
おもかげの隱所うばへ

繪すがた

(一)戀の泉

花と花といかに添ふとも
この薫とかの薫と
まじはりて春をなさずば
誰が心匂ひ亂れむ
絃と絃といかに觸るとも

この音律こかの音律こ
まじはりて樂をなさずば
誰が胸か響き動かむ

この唇は接吻知らね
この耳は密語聞かね
この腕人を抱かね
この眼人にそくがね

奥山の戀の泉を
迸る胸のまことは

我が胸の水流に逢ひて
ゐろがねの響をあげぬ

(二)鳥にしあらば

その春の風をねたみて
その春の人を恨みて
繪すがたをいかに抱くも
繪すがたは永遠に嘆かむ

この心鳥にしあらば

添乳して夫をし忘れず
人妻の微笑む夢を
驚かす鷄の夜叫び

その春の笑に歸りて
その春の人を嬉しみ
繪すがたを抱きつ居らば
繪すがたも永久に笑むらむ

この心鳥にしあらば
夫に添ひて美き稚兒抱く

人妻をめぐりめぐりて
梅園に歌ふ鶯

（三）車のひぐき

繪姿を居室に抱ける
青柳のそよぎの夕
市走る車輪のひぐき
窓くれば乘れるは少女
戰を知らぬ少女か

蝙蝠の彼方此方に
裏切りて安き少女か
敗亡てふ苦も知らぬ顔
眉をひき唇を彩ごり
白粉匂ふ頬さへ憎や

唯聽けや聖人豫言
（なが襟の牡丹くづしも
風に遭ひ滅亡を知りて
白粉も紅も忘れむ）

見よこゝに怨言も云はぬ
繪すがたに春を殘して
人妻となりにし少女
春去れば春を懷はず
秋來れば秋愛憐み
ほつれ髪兒を愛しむ

五のまき

月下白屋

今宵また誘られし
手づくりの人形
負ひ出でし其數を
また負ひて歸るなり

今宵また貶まれし
手製の人形
身を捨てし土なるを

My soul, wait thou only upon God.

——— DAVID.

心なき群集や

今宵また笑ほれし
手づくりの人形
身を戯りし紅なるを
情なき群集や

今宵また賣れざりし
手製の人形
身を別けし白粉なるを
涙なき群集や

（縁日の歸途を
月下なるぞ悲しき）

咲く花も白露の
明日知らぬ悲しさや
わが家の唇も
今日濕び今日乾く

菊次郎齢七つ
先づ餞ゐて先づ逝けり

四つの口三つにせし
あはれなる犧牲や

蒲團なき丸寐の
疊なき床冷にて
老の身の木枕は
母君に病あり

藥をと思へども
白水も隨ならず
家賃のみがらみに

井筒へも近寄れず

（思出の石坂も
月下なるぞ苦しき）

野泉に水を得て
歸路に詣づるは
可哀さに抱かむも
墓石なき新塚や

冬枯の樹は萠み

兒雀は巣に起つを
わが子のみ消に失せて
遙かなり魂の宮

慕ひつゝ打仰ぐ
中空に雲擾ぎ
何か云ふ奥津城の
新草も打戰ぐ

亡き子呼ぶわが聲に
驚きて飛び立つは

赭土を啄みて
巣を營る燕

(梟の夜叫びも
月下なるぞ淋しき)

病む者の渴には
見る人も堪へやらで
わが妻は背きつゝ
おのが血を打進む

いかでかは飲み得むと
髏ひし手を延べて
わが母は爪探る
思出の古葛籠

あゝ昔御守殿の
花も今皺枯れて
拜領の白粉をさへ
一錢にせよと云ふ
水持ちて裏口に

立聞きし垣間見し
破障子ひき披けて
轉び入る我が思
（行方なる三本杉
月下なるぞ佗しき）

童子の土により
わが妻の血汐より
母君の片身より
作りてし人形

其夜より町に出て
値を廉う鬻げども
廉しとも買はざれば
負うて歸る人形

手づくりの人形、
また今宵賣れずして
負ひ出でし憂をば
また負ひて歸るなり

あゝ彼處わが棲家
病める母泣く吾妻
死したる子惱む我
屋根越ゆる不如歸

（橋に倚る趦趄も
月下なるぞ轉てき）

入り難し入り難し
また斯くて歸りなば
人形は殖えむのみ

悲哀は增さむのみ
嘆きつゝ振仰ぐ
大空に光あり
あゝ〳〵こ今ぞ知る
皎皎たる鏡月

野に我を逃れんか
この光草にあり
川に身を投ぜんか
この光波にあり

白銀の光には
わが家も豐なり
月あらば神あらば
わが一族もありぬべし

（あばらなるわが軒も
月下なるぞ嬉しき）

苦しかれ悲しかれ
歸るべし歸るべし
母の家妻の家

月の家神の家

（あはれなるわが家も
月下なるぞ嬉しき）

明治四十年三月一日印刷
明治四十年三月五日發行

定價二十五錢

著作者　小山内薫

發行者　東京市神田區猿樂町二十五番地　若林鑒太郎

印刷者　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

複製不許

發兌元　東京市神田區猿樂町二十五番地
振替貯金口座六三三〇番　中庸堂書店